

# 異人種への視線

近代日本の人種観の誕生まで

齊藤 愛

## I 人種図譜の系譜

### 1 幕末の「万国人物図絵」

幕末から明治時代にかけて、日本人の人種観は変貌をとげる。その背景には世界観の変化があった。そこにいたるまでの前史を概略ながらたどったうえで、現在にもつながる、差別的な視線もふくむ日本人の人種意識が確立された要因を探ってみたい。

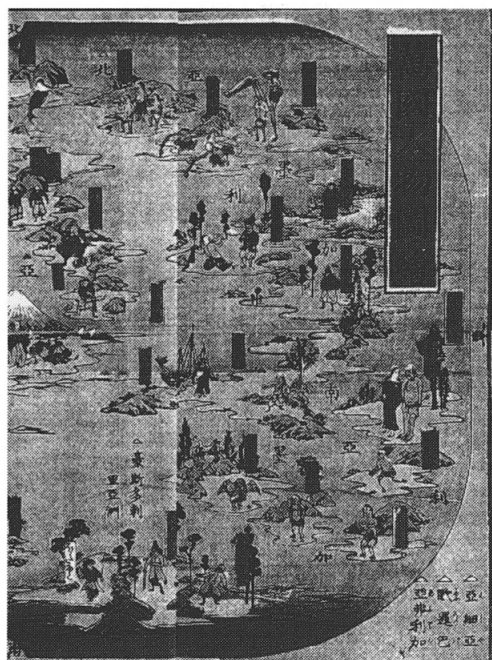
(図1) まず最初に、開国も間近い1850年頃に作製されたと見られる木版色刷りの一枚絵を検討したい。一応六大陸（アジア、ヨーロッパ、アフリカ、オーストラリア、南アメリカ、北アメリカ）の名前は挙げられているが、大陸の姿は消え、世界は様々な身体を持った人々が住む、多島海と化してしまっている。中央には「大日本」が士農工商の社会構造と、富士山、鳥居、昇る朝日で表現されている。それぞれの島々には、「漢土」「蒙古」「いぎりす」「<sup>オランダ</sup>和蘭陀」など実在の国もそれらしき場所にあることはあるが、その他たとえば「<sup>アメリカ</sup>亞墨利加」とある場所には「手長・脚長」その他の島があり、「<sup>アフリカ</sup>阿弗利加」には「<sup>く</sup>狗国」（人々の頭が犬の形の国）や東南アジアの国々が描かれている。「長人国」「小人国」「穿胸国」「羽民国」「女人国」などの空想上の民族も同一画面上に並存しているのが見て取れる。

図1 万国人物図絵 長崎市立博物館蔵



図2 万国男女人物図会 マスプロ美術館蔵





(図2) さらに、もう一枚の絵を見てみたい。これはいわゆる「横浜浮世絵」と呼ばれる横浜開港当時(1859年～)、居留地のみやげ物として売られていた木版色刷り版画の中の一枚で、やはり「万国人物図」の類のものである。ここでも明や朝鮮、イギリスやオランダなどの実在の国人と、手長・足長など空想上の人物が交じり合っている。

一見、これら不正確かつ非科学的な絵は、当時の大衆の知的レベルの低さを示しているだけのようにも思える。しかしここからは、このような世界観があったいどのような歴史的文脈の中で形をとってきたのかを知ることができるといえよう。それは、知識が経由してきた地域的違いを考慮すると、大まかに中国系とヨーロッパ系の二つの系統に分けられるのである。中国系は『和漢三才図会』から『山海経』にさかのぼる流れであり、ヨーロッパ系は幕末の人種図譜本から『四十二国人物図説』、さらには世界図屏風までたどることができる。

なお、「人種」という言葉はおそらく福沢諭吉らの啓蒙書あたりから使われ始めたものと思われる<sup>①</sup>。現在の「人種」という意味の言葉は、江戸時代には「人物」と言うが、本発表では、人間を国別に紹介した書物や絵を「人種図譜」と呼びたい。

## 2 人種図譜本とそのスタイル

冒頭で紹介した絵が描かれた幕末期には、外国船がしきりに日本近海に來航し、アヘン戦争などのニュースも入ってきており、対外意識がかつてなく高まっていた。1853年(嘉永六年)、浦賀にペリーが來航、翌年の日米和親条約締結を皮切りに、次々と西洋諸国との条約が結ばれ、西洋との交流が本格的に始まっている。こうして日本にとって不可逆の、近代欧米諸国との接触が始まるわけだが、それに呼応するように、海外の知識を紹介しようとする書物がいっせいに出版される。世界の人種を解説した人種図譜もその例外ではなく、1854年には『海外人物輯』『改正海外諸島図説』『外蕃容貌圖畫』と一気に三冊出版されている。これらは、実はこれに先立つこと約130年前に西川如見によって



書かれた『四十二国人物図説』という人種図譜本のパターンを踏襲したものである。

(図3) 『四十二国人物図説』は、『華夷通商考』で知られる西川如見がその晩年、1720年(享保五年)に出版した、単行の書物という形では初めての人種図譜である。本書はページごとに各人種の図を載せ、その向かいのページに説明文を付けており、国の位置、気候、人物の性格等を紹介している。まず序文に続き、目次で四十二国の国名を列挙しているが、この並べ方は、日本から西に向かって、地理的に近い順となっている。

本書はその後の人種図譜本の基本的スタイルを確立したものだが、その図は実は、ある一覧図をもとに書かれており、さらに源流をさかのぼることができる。それが、次にあげる「正保版万国人物図」である。

### 3 「正保版万国人物図」と世界図屏風

(図4) 1645年(正保二年)ごろ刊行された「正保版万国総図・人物図」は、日本で最初の版刻世界図(木版刷り)であり、マテオ・リッチの「坤輿万国全図」の流れをくむ世界地図一枚と、四十か国の人物図一枚で一对をなす。ここで検討したいのは人種一覧図(以下「正保版万国人物図」と呼ぶ)のほうだが、これは刊行された人種図としては、日本最古とされている。リッチ図にはこのような人種図はついていないので、西洋の何らかの図版が典拠となっているのだろうと推定されているが、原図は確定されていない。

(図5) たとえば、後年出版された「慶安版世界人形図」には、画面構成や人物のポーズ、モチーフ等がほぼそのまま、やや簡略化されて繰り返されている。また先に触れた「四十二国人物図説」以下の人種図譜本にも色濃く影響を残しているところから、この図が人種一覧図の原型として、長く生命を保ったことがわかる。



図3 『四十二国人物図説』 フランス



図5 慶安版世界人形図 神戸市立博物館蔵

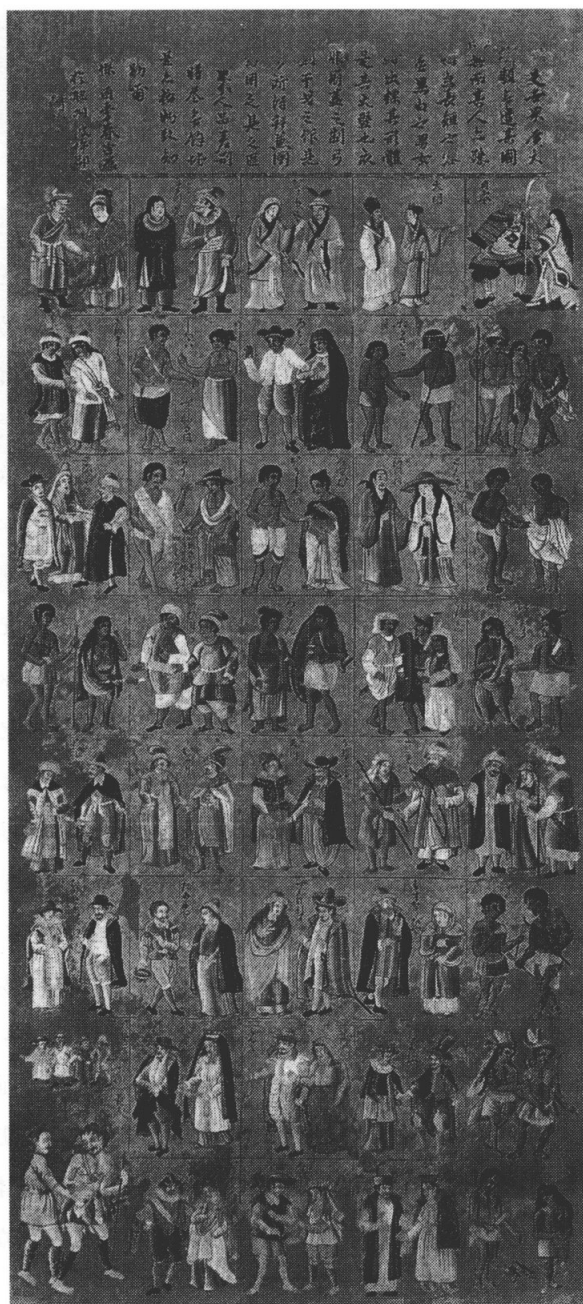


图4 正保版万国人物图 神戸市立博物館蔵

「正保版万国人物図」題言の下には、等分のコマに区切って、縦八カ国×横五カ国の計四十か国が配されている。特徴的なのは、①男女一對のペアが、国ごとに等分のコマの中に区分けされていることと、②日本人が描き込まれていること、の二つである。

この男女一對のペアという発想は、たとえば中国経由の『和漢三才図会』が男性一人でその国を表現しているのと比べると、際立った違いを見せている。また、「万国」と題して日本を入れるか入れないかは、自己意識がどこにあるかを表していると考えられ、この場合は日本が他の国々と同一画面に並べられていることから、外部からの視線に基づいた自己の相対化が意識されていたといえる。外部からの視線というのは、この図は、いわゆる南蛮文化が盛行した時代に描かれた世界図屏風の世界観を踏襲しているからなのである。(図6) フランシスコ・ザビエルが来日したのが1549年(天文十八年)、十六世紀半ばにして、日本は大航海時代のヨーロッパと出会う。ヨーロッパ型の世界像が中国とは違ったルートで入ってきたのだが、その目新しさゆえか、世界地図は華麗に彩色された屏風となって貴顕の室内を飾った。これが十六世紀末から十七世紀前半に描かれた南蛮世界図屏風と呼ばれるものだが、これらの内のいくつかに、万国人物図が付されているのである。十七世紀初頭の西洋の世界図や大陸図は、周囲を諸民族や都市の図で飾る習慣があったが、それらの影響で成立したものと考えられている。

日本に到達する約半世紀前、ヨーロッパにおいては新大陸の発見という歴史的な「他者発見」があり、爆発的に世界に対する意識が拡大していた。他者の姿を地図上に描き入れることは、「発見」という名の下に他者を征服し、名付け、自らの権力下におかれるべき世界が広がっていく意識を記録していたと思われる。世界を一望の下におさめるという大航海時代の気風が日本にも伝播し、権力の限らない伸張を夢想する権力者にとって、魅力的な画題となったのであろう。

しかしそこでもたらされた世界観はヨーロッパからの視線に基づいていたた

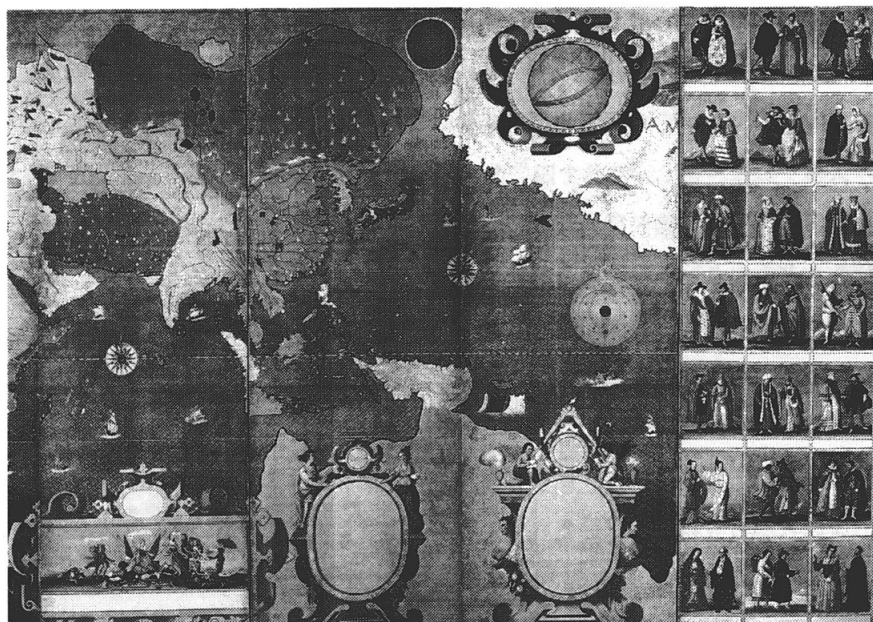


図6 二十八都市図と万国図屏風（部分） 宮内庁三の丸尚蔵館蔵

め、新しい世界像の中の、日本そのものの相対化という副産物をももたらした。その証拠には、先にあげた屏風には日本が第一に目に入るとはいえないような位置に描かれており、それは同趣向の屏風においてはめずらしいことではない。これがやや時代の下った「正保版万国人物図」になると、右上の一番最初に目に入る位置に置きなおされており、外部への意識が弱まった様子をうかがわせる。

#### 4 『和漢三才図会』の「外夷人物」

また、最初の図（図1、2）で見られた、空想上の人物たちの履歴をたどると、もうひとつの系統、というより江戸時代においてはこちらのほうが知の本流であったわけだが、中国系の系譜が浮かび上がってくる。

（図7） まず、人口に膾炙した、つまり人々の意識に深く浸透したという点で第一に挙げられるのが、寺島良安の『和漢三才図会』である。これはわが国

初の絵入り百科事典で、1712年（正徳二年）ごろ刊行された。タイトルが示すように、明の王圻<sup>おうき</sup>が編集した『三才図会』（1607年成立）の日本版を目指し、様々な他の文献からの補強や最新の知識を取り入れて書かれたものである。

人種一覧は、巻十三と巻十四に分けて収められている。巻十三が「異国人物」、巻十四が「外夷人物」であり、この二つは、漢字を知っているかどうか、箸を使うかどうかといった、中華文化圏に属しているか否かで区別されており、いかにも中国中心の世界観を感じさせる。

「異国人物」には震旦（中国）・朝鮮をはじめとして近隣アジア諸国を十一種類挙げるが、「外夷人物」は実に百七十七種を数える。「外夷」には、実在の国々、たとえば「呂宋」<sup>ルソン</sup>、「以西巴爾亞」<sup>イスパニア</sup>、「瓜哇」<sup>ジャワ</sup>なども含まれているが、幻想的な国人たちも数多く収録されている。たとえば、胸に穴のある「穿胸」<sup>せんきょう</sup>とか、羽があって空を飛ぶ「羽民」<sup>うみん</sup>とか、手や足が異様に長い「手長」「足長」「長人」「小人」など。これらはみな中国古代の絵入り地理書『山海経』に起源を持つ想像上の人物たちである。「異国人物」と「外夷人物」の、中華文化圏に属するか否かという分類基準からすれば当然の配置とはいえ、手足が一組ずつ

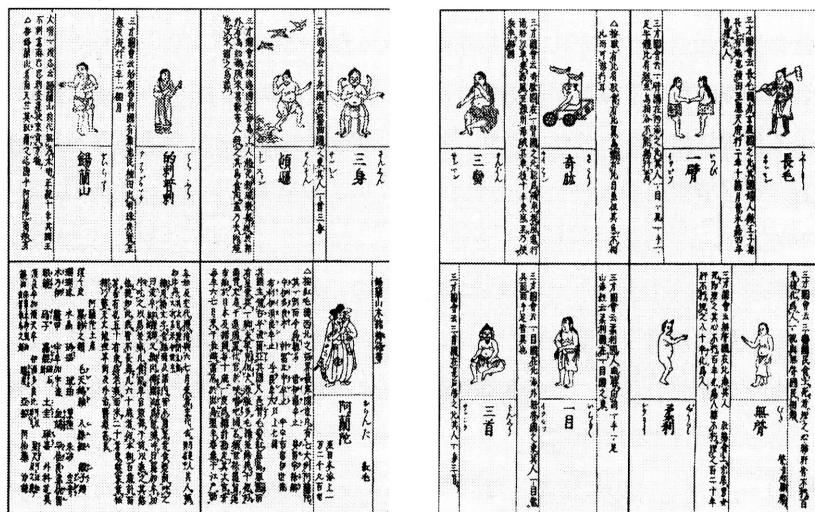


図7 『和漢三才図会』 外夷人物

しかない「柔利」や一つ目の「一目」、頭が三つある「三首」や手が三組ある「三身」やらのあとに「阿蘭陀」<sup>オランダ</sup>と来るのは、やはり異様な感じを受ける。

とはいえ、これまで見てきたように、幕末期の萬国人物図や横浜浮世絵などには、西洋人と手長・脚長が同一画面上に描き込まれているものがいくつも残っており、また、そこまで異様ではなくても、「正保版万国人物図」や『四十二国人物図説』の図にしても、必ず「長人」「小人」とがセットで書き込まれている。どの図も「小人」は四、五人で表されており、『和漢三才図会』の「東方に小人国があり、<sup>せい</sup>跽という。身長は九寸。海鶴は彼等に遇えば彼等を呑み込む。それで外出するときは群行する」という『三才図会』をもとにした記述と呼応している。ここから『和漢三才図会』などの中国経由の世界観が、いかに広範に浸透していたかがうかがえる。

このように、幕末までの世界像は、基本的に国々は同一画面上に並べられているが、中華文化圏を中心とし、その外縁にヨーロッパやアメリカなどが、古くからその存在が信じられてきた想像上の国々とともに位置している、ということができるだろう。

## Ⅱ 世界観の再編成

### 1 戯作と啓蒙書

次に、明治になって書かれた仮名垣魯文の『万国航海 西洋道中膝栗毛』に見られる人種意識を検討したい。江戸っ子の弥次喜多が諸国をめぐる滑稽旅行記という十返舎一九の『道中膝栗毛』を踏まえ、その孫がロンドンの万博を目指す道中の滑稽談という設定である。

『西洋道中膝栗毛』の海外紹介のネタ本は、当時いわゆる「福沢本」と呼ばれた啓蒙書であり、文中には『西洋事情』（1866年）『西洋旅案内』『西洋衣食住』（1867年）『世界国尽』（1869年）、後編になってくると内田正雄『輿地誌略』（1870～87年）などが挙げられている。さらにフランス帰りの知人の帰朝談を参考にしたという。

つまり言いかえれば全編ほぼ空想によったものであるから、外国人や外国風俗に関して、どういったイメージや偏見が醸成されていたのかを知るのに都合がよいとも言える。「弥次喜多」による「滑稽道中記」という読み慣れたスタイルに、当時最大の関心事だった外国風物をおもしろおかしく組み合わせのだから、福沢諭吉らによるエリートの啓蒙運動に対して、それに多大な関心をいだきながらもより消化しやすい形で提供されることを望んでいた、いわゆる大衆にとっては格好の読み物だったのだろう。本作は大ヒットとなり、魯文のみならず当時沈滞していた戯作界全体が息を吹き返したほどであったという。

(図8) 十二編からは、書き手が魯文から友人の総生寛<sup>みそうかん</sup>に変わる。その冒頭にこの挿絵が掲げられているが、丁髷帯刀の「未開の人」、和服姿であるが靴をはき帽子をかぶりこうもり傘を持った「半開の人」、完全な洋装でひげをたくわえた「開化の人」、とその西洋化の度合いによって当時の日本人男性の開化度が図解されている。つまり、「文明開化」とは西洋化することである、という概念が非常に明快に示されているのである。



図8 「西洋道中膝栗毛」



この十二編上は、船中の客に生かじりの知識人を登場させ、退屈を持て余した弥次喜多と通訳の通次郎が講釈を聞きに行く場面である。「世界萬國の沿革<sup>かわり</sup>」と題して、猛獣狩りをして農業も貨幣経済も知らず、住居が定まらないものを「未開の民」「セミバルベリヤン」とし、現在でもアラビア、シベリヤ、ダッタンなどがこれにあたるという。また、そういった「未開の民」が、農業を覚え集落をつくり、少しずつ農工商を営み、芸術や学問を学び、他国と交易をはじめ礼儀を重んずるようになってきたとはいえ他から学ぼうとしないのが「半開の民」「ハーフシフイライスド」で、現在の支那、ペルシアである。また農業をはじめ商業や工業、学問芸術が盛んで、人情が虚飾少なく法を貴ぶ「文明開化」「インライテンド」のヨーロッパ、と説明が続く。

この、直線的な段階を追って文明が進歩していく——それは「西洋化」とほぼ同義なのであるが——という考え方は実は魯文の種本、福沢諭吉の啓蒙書がとっていた立場から来ている。

(図9) 『西洋道中膝栗毛』の中で、北八(本文中では「北八」と書かれることが多い)が「せけへくにづくしハ毎日よむので聞きくたびれた」と言っている場面があるが、その『世界国尽』の中の挿絵に、ここにあげたようなものがある。これを見ると右から左へと、時間軸に沿って「混沌無知」から「文明開化」への進歩の段階が辿られているのがわかる。

本文中では、冒頭で「世界人民の事」として人種を「白・黄・赤・黒・茶」に分け、居住地域に人種を結びつける。続けて、アジア、アフリカ、ヨーロッパ、北アメリカ、南アメリカ、太平洋諸島の順に、諸国の風俗や制度が語られていくのだが、その中ではあからさまに優劣の差が言及されているのである。

たとえばアジアでは、「支那<sup>カラ</sup>」は「文明開化<sup>アトズサリ</sup>後退去、風俗次第に衰て徳を修めず知をみが、ず」アヘン戦争に負け、「なをも懲ざる無智の民」と、驕りが過ぎて失敗した大国として描かれ、アフリカなどは、「土地は廣くも人少なく、少なき人も愚かにて文字をしらず技藝なく」「無智混沌の一世界」と、まったく文明が絶えた地域として、最低視されている。

これらに対してヨーロッパは「富國強兵天下一、文明開化の中心と名のみにあらず其實は人の教の行届き徳誼を修め知を開き文學技藝美を盡し都鄙みやこあなかの差別なく諸方に建る學問所、幾千萬の數知らず」とその「世界に誇る太平」ぶりを褒め称えている。

また、人種の優劣については1869年（明治二年）の『掌中万国一覽』中で、「人種の論」として詳しく説明されている。「白哲人種」「黄色人種」「赤色人種」「黒色人種」「茶色人種」とやはり人種を五つに分け、「白哲人種」に対して「容貌骨格で美なり」「精進は聡明にして、文明の極度に達す可きの性あり。これを人種の最とす」と最高の評価を下しているのに対し、他の人種はそれに次ぐものとされているのである。



図9 「世界国尽」

## 2 文明ヒエラルキーの啓蒙と人種差別

『西洋道中膝栗毛』の、セイロン島で「アダムが峯」を見に行く場面では、途上北八が入り込んだ家でくすねたパンが、実はこの土地の聖人の糞尿を混ぜ込んだもので、現地の人はありがたがって食べるなどという奇怪な知識が、「福沢本」から得たものであると但し書きをつけて披露されている。これを知らなかった粗忽な北八的一幕の滑稽話とされているが、『西洋旅案内』には確かに「セイロン島は釈迦如来誕生の地にて、島の人皆佛法に帰依せり」（福沢全集第二巻、137頁）とはあるけれども、このような糞尿に関する記載はない。魯文の創作と思われるが、「土人のくろんぼう」の風俗に、日本人がまぎれもない侮蔑の意識を持っていることを際立たせる場面であろう。まさに今日から

見れば、ドナルド・キーンが「ところどころ面白いくすぐりがないわけではないが、魯文が作中で弄する諸諺は古臭いうえ尾籠すぎ、とりわけ外国人、なかでも肌の黒い人種に対する偏見は、現代の読者の眉をひそめさせずにはおかないだろう」<sup>②</sup>と本作を評したように、人種差別意識がむき出しの形で表出しているのである。これはしかし、啓蒙運動の柱となる世界像が、白人のヨーロッパを頂点とし、黒人のアフリカを最底辺とする階層を成していることを考えれば、全編先行テキストの引用で成り立っているようなこの作品がそのような人種差別観に至るのも、当然の帰結と言えよう。

本発表では、ベンヤミンのいう「近代の時間」が始まる直前までを「人種図譜」という表象の系譜を追うことで、日本における世界観・人種観の変遷の概略をたどった。長らく中国という先進文明国の影響を強く受けながら、大航海時代のヨーロッパとの出会いによって、世界地図にともなった人種一覧という形式とともに世界を一望する視線——支配の欲望に裏打ちされたものだが——が導入された。鎖国政策下では海外知識の更新が文献によったものにならざるを得なかったため、主流であった漢学の影響を受けて中国化しながらも、異人種への関心は引き継がれた。そして幕末になって今度は帝国主義・植民地主義時代の欧米と対峙し、好事的な対象になっていた人種図譜が、政治的な文脈の中で読み直されることになる。そして明治政府の成立と連動する啓蒙運動によって、それまで平面上に並んでいた世界のさまざまな文化は、「文明開化」を頂点とする、時間軸に沿った直線的なヒエラルキーに編成しなおされるのである。

さらに、「日本人」という概念を確立するのに、文明ヒエラルキーの存在の指摘とその中で現在の位置、そして一段でもその階梯を上がる、こと、という進むべき方向を示す具体的な青写真を示すことが不可欠であった。その際、現在の目のくらむような彼我の懸隔を、人種——すなわち本質性に求めてしまうと、劣等人種の位置にある日本人は、永遠に白人による西洋諸国に追いつけな

いということになってしまう。しかし、文明は等しく進化するという考え、つまり、遅いか早いかの違いはあっても階段を懸命に登っていけば、いずれ「文明開化」の域に到達するという考え方は、今劣等の地位にあることを自覚させられた日本人の眼には、逆に極めて魅力あるものとして映じたのではないだろうか。

弥次郎は文明開化の講釈に対して、実には的確に「して見りやア西洋だといつても皆<sup>りこう</sup>怜悯ではじめつから頑<sup>おまなこと</sup>愚事ハねへといふ譯でも御座やせんネ」と感想を述べている（明治文学全集 1、108～109頁）。ここには「當時（現在：注引用者）歐羅巴は文明開化世界第一とて相違もなきことなれども、<sup>むかし</sup>往古は矢張混沌無知」（『世界國盡』）という福沢諭吉の声が響いている。

この世界像の中では、近代ナショナリズムによって創生された「日本人」は、今自分が進歩の梯子のどのあたりにいるのかを、地政学的にたえず確認する作業を迫られることになる。つまり、白人の欧米、黄色人種のアジア、黒人のアフリカという地理的な認識が、「開化・半開・未開」という進歩の時間軸に沿った序列化と結びつけられるのである。そして現在「半開」の状態にいるアジアに位置する日本は、梯子の上にいるものを目指し、下にいるものを軽蔑し支配するという心性を、自らの中に書き込んでいく。

このことは、副産物として人種差別思想を固定化する働きをもたらした。「上」にいる白人と、それに対して「下」にいる有色人種から抜きん出ようとしている「日本人」、といった自画像は、啓蒙運動から明治国家の指針となった「文明開化」の構造が必然的に生み出したものであり、いわば国家のお墨付きのもとに、これより公然と文明ヒエラルキーは人種差別思想と結びついて普及していく。

### 〈主要参考文献〉

- 応地利明『絵地図の世界像』岩波新書 1996年  
小野忠重編『紅毛雑話』双林社 1943年  
織田武雄・室賀信夫・海野一隆編著『日本古地図大成——世界図編』講談社 1975年  
開国百年記念文化事業会『鎖国時代日本人の海外知識』幹元社 1953年  
海後宗臣編『日本教科書大系近代編第15巻 地理（一）』講談社 1965年  
仮名垣魯文『明治文学全集 1 明治開化期文学集 1』筑摩書房 1966年  
神奈川県立博物館編『集大成横浜浮世絵』有隣堂 1979年  
木下直之『美術という見世物』ちくま学芸文庫 1999年  
清野謙次・平野義太郎共著『太平洋の民族＝政治学』日本評論社 1942年  
坂元満・菅瀬正・成瀬不二雄著『原色日本の美術第20巻 南蛮美術と洋風画』小学館 1982年  
高島三良訳『山海経——中国古代の神話世界』平凡社ライブラリー 1998年  
長崎市立博物館『長崎市立博物館資料図録Ⅲ』長崎市立博物館 1994年  
文化庁監修 坂元満・戸枝敏郎編『日本の美術 No.328 横浜版画と開化絵』至文堂 1993年  
福沢諭吉『福沢諭吉全集第2巻』岩波書店 1959年  
横田洋一編『横浜浮世絵』有隣堂 1988年  
和漢三才図会刊行委員会編『和漢三才図会 上』東京美術 1970年

### 〔注〕

①『日本国語大辞典』では仮名垣魯文の『西洋道中膝栗毛』が初出として挙げられている。

② Donald・キーン『日本文学の歴史10 近代・現代篇』中央公論社、1995年、36～37頁。

付記・本稿は平成10年度財団法人上廣倫理財団研究助成および平成12年度科学研究費補助金による研究成果の一部である。

・旧字は適宜現行の字体に改めた。

### ＊討議要旨

Gossmann Hilaria氏は、逆に民衆の認識に対して文学作品がどの程度影響を与えたか、また、現代にもこういった人種観は残存しているのか、と尋ね、発表者は、そもそもこの研究を始めたきっかけは、日本人が「脱亜入欧」思想を現代まで引きずっているのではないかという問題意識を持ったからである、現代文学にも例えば遠藤周作「アデンまで」、三島由紀夫「金閣寺」、大江健三郎「飼育」など外国人が登場する作品はあり、研究も多いが、その根元にある世界観を探ろうと考えた、と答えた。

平岡敏夫氏は、丸山真男『日本政治思想史研究』に代表されるような、政治史的な視点、すなわち「外患」がnationの形成を促した幕末明治の動きに、この研究を重ねて考えると非常に面白い、ただ、自由民権運動などの動きを見ると、日本人の人種観も単に外国人への蔑視あるいは嫌悪だけではないのではないか、また明治初期のテヌの文学史を受容した三上参次・高津敏三郎におけるraceの概念なども視野に入れてはどうか、と助言した。

Haruko Iwasaki氏は、江戸の人のものの見方として、ヒエラルキーとカテゴリーを立てるのが好きだが、そこに西洋のものが入ってきたときに衝突はなかったのか、私の印象では例えば「未開・半開・開化」の図などは浮世絵の三枚続の枠組に西洋の概念がすりこみ込まれてしまったように見える、と述べ、また、中国では周縁の国はほかされているが、西洋は全て記述しないと気がすまない、とい

う違いがあるように思うがどうか、と尋ね、発表者は、江戸時代における人種観とその記述は、中国系が大衆に普及していて、蘭学を通じて入った西洋系のものは知識人向けのものであったが、明治の啓蒙運動が中国系を駆逐したようだ、と答えた。

神野藤昭氏は、朝日新聞の日曜版に連載されている「名画日本史」にペリー図が取り上げられていて（2000年10月29日）、そこに「恐怖心の投影 好奇心の結晶」という見出しがあって感心したが、ペリーの肖像は個性的なのか典型的なのか、人種観がどのように反映されているのか、と尋ね、発表者は、天狗に似ている描き方は、恐怖心の類型的表現といえるが、それから10年ほどたった「横浜浮世絵」における外国人像は好奇の対象としての表現、そこからは大きな変化が窺える、この時期の攘夷運動と並行しているのも面白い、と答えた。